<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>テーマ</td>
<td>叛逆する「中国のノラ」・廬・の再婚と近代家庭批判</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>羽田 朝子</td>
</tr>
<tr>
<td>書籍名</td>
<td>人間文化研究科年報 [第25号] 家庭と家族</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2010-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10935/1549">http://hdl.handle.net/10935/1549</a></td>
</tr>
<tr>
<td>テキストバージョン</td>
<td>出版者: 奈良女子大学デジタルサイエンスリポジトリ</td>
</tr>
</tbody>
</table>

提供する情報は、出所のものに準拠しています。
叛逆する「中国のノラ」
—廃婦の再婚と近代家庭批判—
羽 田 朝 子*

はじめに

中国近代の五四新文化運動（1910 年代後半～20 年代）の中で、西洋思想の洗礼を受けた知識青年たちは「個」の権利を主張し、中国を支配してきた封建制度を打ち倒そうとした。彼らはまず封建制を支える旧家の束縛からの解放を叫び、「父母の命、師の言」による旧式結婚に反対し、自由恋愛を経た結婚を求めた。こうした家庭革命に関する論戦の中心となったのは、文学革命の旗手でもあった胡適（1891～1962）である。彼は1918年6月、『新青年』（4 巻 6 期）にイブセン劇『人形の家』を翻訳・発表した。同時に論文「イブセン主義」を巻頭に掲載し、この劇の主人公ノラを封建的家に反抗して家を飛び出した、勇気ある女性として紹介したのである。

本来、イブセン『人形の家』（1879）は欧米においては近代批判として、具体的には近代社会における恋愛結婚した夫婦のあいだに起こった葛藤をテーマにしている。一見愛に満ちた夫婦でありながら、彼らの間には実は経済力を持つ夫と持たない妻の力関係が歴然と存在する。ノラが家を出たのは封建社会の古い思想に慣ったからではなく、近代家庭が内包する男女の問題——ジェンダー非対称に気づいたからであったのだが。しかし胡適は個人の自由意思による「恋愛」がまだ受容されていない当時の中国にあって、『人形の家』を目前の問題であった封建的家への批判を通じる作品として紹介した。そしてノラの家出を男尊女卑、三夫四従を強いる家から逃れ、自由と愛情に満ちた結婚を求めたものとして解釈したのである。

この時期、胡適は『新青年』に陸続きと女性解放理論を発表している。例えば「貞操問題」（5 巻 1 期 1918.7）では恋愛結婚を平等な夫婦関係を実現するものとして提唱し、「アメリカの婦人」（5 巻 3 期 1918.9）では恋愛結婚をする自立したアメリカの女性を紹介している。こうした胡適の恋愛に関する一連の言説——「ノラ言説」は、当時の古い家の人権に苦しんでいた知識青年達に大いに受け入れられた。そして彼らはノラを新しい女性のシンボルとしてもてはやし、近代家庭の実現を理想として掲げたのである。

こうした五四の思潮を受けた若い知識人女性の中から、自由恋愛に基づく近代家庭を実現する者が現れた。この時期の代表的な女性作家である廃婦（1899～1934）もその一人である。彼女は五四運動が勃発した1919年に北京女子師範大学に入学した。在学中に文学研究会に参加し、その機関誌『小説月報』に青年の恋愛と封建的家との衝突を描いた処女小説「一個著作家」（12 巻 2 号 1921.2.10）を発表している。

実生活においても廃婦は文学研究会の同人である郭夢良（1899～1925）との恋愛を成就させ、1923年に結婚している。しかし、この結婚は郭に旧式結婚によって娶った妻がいたため世間の批判を裕びた、当時の廃婦については、友人の劉大杰は次のように語っている。「独断の自信に満ちた行動は、まるでイブセンの『ノラ』のようだった」と。

結婚後、2 年ほどで郭夢良が肺病のため亡くなり、廃婦は寡婦となるが、その後5年後、1930年に8歳年下の大学生李唯建（1907～1981）と恋愛の末に再婚し、世間を驚かせた。そして難産によって命を落とす1934年まで、廃婦はその作品の中で時代の過渡期にあって

*emiauculture generic
苦悩する女性の恋愛・結婚・仕事・人生観について書き続けた。

このように廃楼は五四新文化運動の洗礼を受け、『中国のノラ』を自ら演じたのが、30年代になると彼女はノラの本来の問題——近代家庭にけしも男女の問題をいち早く意識し、近代家庭への批判を展開することはなる。そして廃楼自身、『廃楼自伝』（上海第一出版社、1934年）の中で、この30年代の時期を思想の転換を経て飛躍した「開拓期」であるとして高く評価しているのである。

このような廃楼の自己評価に関わらず、先行研究ではこの時期の作品に注目したものは少なかった。それは茅盾が発表した『廃楼論』（『文学』3巻1号1934年にわけるところが大きい。彼は廃楼を「五四の時代の子」と呼び、彼女の初期の作品を五四期の思想を反映したものとして高く評価したが、以後の作品はその枠を出ない「停滯した」ものと評価したのだ。茅盾の目には、廃楼が描いた女性知識人をとりまく問題は、どれも「家庭の瑣事」として映ったのである。

しかし五四期の他の女性作家たちが恋愛結婚の後は夫に寄り添い、それ以上恋愛や家庭について掘り下げなかったのに対し、廃楼は生涯を通じて近代家庭について思考し続けた稀有な作家である。

そこで本論では、廃楼が五四の終息後の30年代に執筆した作品に注目し、さらに彼女の近代家庭に対する思想の変遷を検討する。これを通して、五四期に理想とされた近代家庭が実際のところ女性にとってどんなものであったのか、女性たちはそれによりどのような意識の変革を凌ぐのかを考察したい。

1. 近代家庭への批判

まず廃楼が30年代に展開した近代家庭批判の代表的な言説を見てみよう。以下に「男性と女性（男人和女人）」（『時事新報』副刊『青年』1933.8.25）、「今後の女性の活路（今后妇女的出路）」（『女声』1巻12号1933.3.16）という2篇の散文を取り上げる。

1.1 「男性と女性」——恋愛に潜む男女不平等の指摘

「男性と女性」は小説風の形をしており、登場人物は恋愛によって結ばれた夫婦である。詩人である夫は「平凡な家庭生活でインスピレーションを満たすことができない」と、他に恋人をもっている。妻は夫の「君こそが世界中で一番僕を理解している」という甘い言葉に負けて、笑顔で彼を恋人との対象に送り出す。家に一人残された妻は突如として目覚め、次のように言う。「ノラの考えはすばらしいわ。この人形の家を返って、他の道を求めるのは真理だわ」「妻が家を出ようと身支度を整えたところに、夫が帰ってきた。

「許してくれ、僕たちの可愛いい子供のために、僕を許してください！」「追いすがる夫を見た妻は情にぼたされて、「ノラは結局イプセンの理想人物にすぎないのだわ」と家出を思いとどまってしまう。

廃楼はこの作品において、平等な男女関係をもたらすはずの恋愛の陥落を暴き、そこに潜む男女不平等を痛烈に批判している。主人公の女性がノラを思いながらも、夫への「愛」のために不平等を許容し、最後は家にとどまる姿が描かれている。この作品を廃楼は次のように締めくくる。「男性はこのような永遠に成功をおさめ、女性はこのような永遠に沈淪し、

—38—
したままなのだ！（男人就這樣永遠獲得成功，女人也就這樣萬劫不復的沉淪了！）」と。

1.2 「今後の女性の活路」——性别役割分担への批判

次の論文「今後の女性の活路」では廻りは良妻賢母主義に反対し、近代家庭における性别役割分担が女性の独立性を失わせるのだと批判する。

時代の変革は間接なく回り、イプセンは早くに女性の進むべき道を我々に指し示した。……しかし事実は、ノラはおく少數で、大多数の女性は、依然として人形の家の主人公なのだ。さらに忘却癖のついた女性は母としての権利を守ることを極め、裏で寄生的幸せ生活を送っている。これに加えて一部の女性は、頭の中にまだ封建時代の余毒が残っていて、「男は外、女は内」の荒唐無稽な説を信じ、ご苦辛にも個性のない従順な賢妻、家事を切り盛りする良母になっている。同時に多くの男性中心主義の教育家は、……女性の知的力体は男性に適わないとか、良妻賢母は女性の唯一の天職だと考えて、これらの偏った言葉の帽子を女性の頭にかぶせ、彼女たちが家の内に帰らずを得ないようにしている。（時代的転換不停息的在轉動，易卜生早已把婦女的出路揭示了我們。……不過在事實上，娜拉究竟是極少數，而大多數的婦女呢，仍然作着傀儡家庭中的主角。而且有一些懶散慣的婦女，她們拿擁護母權作裝飾，暗地裏過着寄生的享樂生活，另有一部分人呢，因為腦子裡仍存着封建時代的余毒，認為「男治外女治內」的荒謬議論，含悲苦作一個無個性的柔順賢妻，操持家務的良母。同時許多男性中心的教育家，……）

such as the women's intelligence and mental strength is not suitable for men. Although there are a few, the majority of women, still act like puppets in their families. And there are some lazy and habitual women, who use mother's rights to decorate their lives, secretly living a寄生的享樂生活，另一部分人呢，因為腦子裡仍存着封建時代的余毒，認為「男治外女治內」的荒謬議論，含悲苦作一個無個性的柔順賢妻，操持家務的良母。同時許多男性中心的教育家，……

廻りは、女たちは家に閉じ込められた結果、孤立した性格を失い、社会的地位を失い、個性を埋没させてしまった、と指摘するのである。そして彼女はこうした現状を打開するために、次のように提言する。家庭は男女が共同で作るもので、経済は男女で分担すべきあり。また家事も當然男で負担すべきである。そして最後に次のように言う。

今後の女性の進むべき道は、家庭の圧迫を打破して社会に出ること、つまり人形の家を逃げ出し、人の生きるべき生活をし、女になるだけでなく、さらに人にならねばならない。これが私のただひとつのスローガンである（我對於今後婦女的出路，就是打破家庭的藩籬到社會上去，逃出傀儡家庭，去過人類應過的生活，不僅僅作個女人，還要作人，這就是我唯一的口號了。）

このように廻りは、イプセンが本来提出したノラの問題——近代家庭の中にいそむ男女の問題を意識し、近代家庭に対して叛乱を唱えたのである。

では五四的洗礼を受けた廻りは、どのような思想の変遷を経て近代家庭を批判するに至ったのだろうか。それを検討するために、以下の章では、廻りが生涯で経験した3つの家庭——生家、最初の結婚、再婚について見ていきたい。

2. 生家と最初の結婚
2. 1 旧家の暗い記憶

廻りは原名を黄英といい、1899年5月4日に福建省廻りで生まれた。父は清朝の舉人で、
母は教育を受けたことのない旧式の女性であった。母は廃隠が母方の祖母が亡くなった日に生まれたため、不吉な子として忌み嫌い、乳母に預けてしまった。病弱であった廃隠は母をはじめ三人の兄、妹からも嫌われ、愛に恵まれない幼児期を過ごしたという。廃隠は『廃隠自伝』（以下、『自伝』）で当時にについて次のように述べている。

（私は）二歳の時には体中にできものができ、1日中泣くので、母は怒ってもう少しで殴り殺すところだった。乳母がそれをみてかわいそうに思い、次のように母に持ちかけた。黒を彼女の家に引き取り、もし良くなったら連れ戻し、死んだらそれまでということにしようと。母はこの申し出を聞くと、謝罪することなく受け入れた。（在両歳の時、長了一身の病気、最終的に母は気を失いよう死に、家族は助けられなかった。廃隠は元気な母親たちから逃れるために、廃隠は廃隠に勉強に励んだ。彼女はまず高等小学校に合格、さらに公費の北京女子師範学校預科に合格し、母や親戚達を驚かせた。

1905年、廃隠6歳の時に父が心臓病で亡くなる。その時母は36歳、長男の兄は15歳であった。その後一家は北京の母方の叔父のもとへ身を寄せる。1908年、母は10代の廃隠を教会が経営する北京女子貢生院へ入学させる。その理由は学費が安く、廃隠を厄介払いできるからだった。貢生院の学年の健康な生活環境と粗末な食事から逃れるために、廃隠は廃隠に勉強に励んだ。彼女はまず高等小学校に合格、さらに公費の北京女子師範学校預科に合格し、母や親戚達を驚かせた。

18歳のとき女子師範預科を卒業したが、当時は女性が進学できる大学はなかった。また兄が留学中であったため、廃隠は家計を助けなくてはならず、女子中学や小学校で教鞭を執った。1919年、北京女子高等師範学校（後の北京女子師範大学）の学生募集が始まるとき、当時20歳だった廃隠は受験を希望する。しかし母は大反対で次のように言った。「女の子が中学卒業したらそれまで。さらに勉強して、いったい何をするつもり？それに私は今お話に言う金はない。自分でもよく考えて見てください。（一个女孩子,已經中學畢業,就很夠了,還要讀書,作怎麼?而且我現在也沒閒錢來供給你,你自己去細想想吧!）」

そのため廃隠は北京で半年間学習に立ち、受験の資金を用立てると、北京に戻った。試験には間に合わなかったが、9月から女子高等師範学校国文部に聴講生の資格で入学し、半年後に首尾よく正規生として編入することができた。

2.2 初期の結婚

廃隠が女子高等師範に入学した後も、あくまで進学に反対な立場をとる母とは葛藤が続いており、母は一切の学費の援助をしないばかりか、彼女が家に帰るたびに泣いたという。

廃隠が女子師範に入った1919年はちょうど五四運動が起こった年であり、西洋の新しい学説が続々と中国に紹介された。廃隠はそれらに大いに興味をもち、新しい書籍や雑誌を買ったり同級生と議論したり、また廃隠は女子師範で胡適の『中国哲学史大綱』の授業を受けており、当時彼が推進していた「ノラ言説」を受容していたと考えられる。廃隠は積極的に社会運動に身を投じ、学生会の幹部に選ばれ、デモや集会にも精力的に参加した。他大学合同の会にも出席し、そこで北京大学の哲学系で学んでいた郭夢良と知り合った。廃隠は彼の冷静沈着な人柄や、また発表論文を多く目にしたことご彼の思想を知り、
懸かれていたのである。
廼木は1922年23歳の時に女子師範を卒業し、翌年に北京大学を卒業した郭夢良と結婚した。しかし郭夢良には旧式結婚による妻があったため、廼木は法律上では「妾」となったのである。そのため廼木の家族や、友人たちみな彼女を第一に、嘲笑したという。廼木は封建勢力に果敢に反抗し、恋愛を旗印とする「中国のノラ」となるべく新しい家に飛び込んでいったのである。

2.3 近代家庭への幻滅——主婦の憂鬱
廼木は旧家において封建的な迷信や男尊女卑によって苦しめられた暗い経験を持っていった。その分、彼女は自由と愛情に満ち、男女平等な生活をもたらしてくれるはずの恋愛結婚に対し、大きな期待を持っていだろう。しかし結婚後まもなく現実と理想との違いに苦悩することになるのである。
廼木は1925年に女子師範時代の創作を集めた作品集『海濱故人』を出版し、この年の初めに女児（郭薇薇）を出産した。しかし同年10月には夫・郭夢良を肺病で亡くしてしまう。
この間の結婚生活のことを、廼木は『自伝』の中で次のように語っている。

私の処女作『海濱故人』が出版されてから、生活に変化があった。その変化の中で私の心境は複雑であった。一方では満足し——様々な困難があったが、私は郭君と結婚していた。また一方では失望を感じていた。理想の結婚生活と実際の結婚生活は、全く違っていたからだ。そんな心境の時に家庭内の瑣事も重なり、半年くらいは原稿が書けなかった。……（私の処女作、『海濱故人』出版以後、我因生活上發生了變化。在這種變化中，我的心情是複雜的。一方面我滿足了，——就是在種種的困難中，我已和郭君結了婚，而一方面我是失望了——就是我理想的結婚生活，和我實際的結婚生活，完全相反，
在這種心情中，又加着家庭的瑣事，我幾乎換筆半年不曾寫文章。）
廼木はこの時期、恋愛結婚後に家庭に入り主婦となった女性の憂鬱をテーマとした作品を描いている。「勝利以後」（『小説月報』16巻6号1925.6.10）では、恋愛のために全てを犠牲にし、家と戦って困難を乗り越え結婚した女性——「勝利」した女性が、結婚後は社会で活動する場を得られず、人生の高遠な理想と縁が切れていたことに苦しむ。また「何処を帰程」（『小説月報』18巻2号1927.2.10）では、結婚後に妻や母となった女性が、家庭の瑣事に縛られる生活に疑問を抱き、社会事業に参加できない自分は、時代の落伍者だと煩悶するのである。

どちらの作品も近代家庭に幻滅する女性の姿が描かれられており、彼女たちは家庭に閉じ込められて社会的地位を失い、「側」を失ってしまったことに気づいて苦悩するのである。彼女たちの苦しみは近代家庭に潜む男女不平等——性格役割分担によるものなのだが、この時点では廼木はそこまで指摘することはなく、ただ家庭に「帰程（＝安息の場）」を見出せない疲労だけを描いている。
郭夢良が1925年10月に亡くなると、廼木は彼の棺に付き添って郭の実家の福建に行く。彼の地には姑と正妻がいたが、そこで娘とともに滞在し、女子師範で教鞭を執った。しかし姑と折り合いがあわず、半年後に上海へ戻っている。そして大夏大学附中の女生徒指導

— 41 —
員をして生活を支えた。この時期郭夢莉の死と前後して、廬隠は母と親友の石評梅を亡くしており、身边に不幸が続いたため、悲鳴のあまり酒に溺れたという。劉大濤はこの時の彼女について次のように言っている。「（廬隠は） 子供を抱えて、収入は少なく、生活がとても苦しかった。...私は彼女に過去を忘れられて新しい愛のある生活を始めるように言ったが、彼女は“男性！愛情！それらを私は本当に恨んでいるわ。これらはみな実に私を苦しめた。私は愛情という無臭から離れない」と語った」と。この言葉からも、廬隠が結婚というものに失望していたことが窺える。

3. 再婚と思想の転換
3.1 「小情人」との再婚

寡婦となった廬隠は恋愛や結婚といったものを遠ざけ、娘を養うため教壇に立ちながら文章を書いて生活を立てていた。しかし 1928年、廬隠 29歳のとき、清華大学に入学したばかりの李唯建と出会う。その時李唯建は 21歳。西洋文学を専攻し、パイロンやジェリー、タゴールを敬愛する若き詩人であった。李唯建は北京大学哲学科の教授・林宰平を訪問した時、机の上にあった廬隠の編輯した文学雑誌『華嶺月刊』を目にしてから、彼女に興味を持った。彼は林宰平に紹介を依頼し、林宰平と廬隠との共通の友人である瞿世英の家で二人は会うことになった。その後二人は手紙をやりとりし、頻繁に往来するようになった。さらに李唯建は廬隠の熱心な求愛に廬隠が応える形で、二人は 1930年に結婚したのだ。

廬隠は李唯建について『自伝』で次のように述べている。

彼は勇敢で、徹底して新しい時代の人物であり、頭の中には封建思想の遺毒がなかった。一切を懸ることなく、彼には熱烈な純情があり、熱烈な想像があった。（彼は個の勇敢な、徹底的新時代の人物、在他的腦子裏沒有封建思想的流毒，沒有可顧忌的事情，他有着熱烈的純情，有着熱烈的想像。）

廬隠にとって最初の結婚は「封建的家への反抗」という意味も有していた。しかし今回の再婚は意味が違っていた。廬隠には亡くなったといえばかって愛した夫があり、その男性との間に娘があり、さらには李唯建との間に 8歳の女児がいたのであった。

そのため二人の結婚はジャーナリズムを驚かせ、文壇にセンセーションを巻き起こした。特に二人の女の名前は当時にあって大いに非難の的となった。また前夫との子（再婚当時 5歳）は若き李唯建を父として認めるかったという。

また大衆のみならず、廬隠と同じように五四の洗礼を受けた知識人もこの結婚には眉をひそめた。例えば女性作家の蘇雪林は廬隠の女性師範の同級生でもあるが、「關於廬隠的回憶」（『文学』2冊 3号）で次のように言っている。

何年か前、彼女（廬隠）と李唯建さんが恋愛して日本に渡り、まもなく結婚したという話を聞いた。また李さんが彼女より若かったので、「廬隠の若い情人」はあっていう間に噂の的となった。民国 19年（1930年）に私が安慶の安徽大学で教鞭を執っていたとき、舒畹藻や呉婉貞（どちらも女子師範時代の友人）……と廬隠の近況について語りあった。二人は異口同音に彼女のことをふしだらだと言う、以前すでに妻のある郭さんと結婚したのだって大きな間違いだったのなのに、今また年齢が離れている李さ
と恋愛するなんて普通の恋愛だと言った。私も彼女ふたりの批判は善意からのものだと思っていたし、私も廃縁の行動は尋常でないと思っていた。(前年友見見だ)誰が李唯建先生の愛を、同婚は、久々に結婚の近く、又びやく李君比彼年若、一時廃縁の小情人伝え、民国二十八年我到安慶安徽大學教書、会見梅艶子女士と程婉貞女士……談到廃縁近況。二人異口同音の批評她太浪漫、並みて從前與使君有婚的郭君結婚已是大錯特錯;現在又與年齢相差甚遠的李君愛戀，更不應該了。我知道她二人的批評是善意的，(便當然也覺得廃縁這種行為太出奇。) こうした中、廃縁は「廃縁は二人のことで、他者が口をはさむことではない」 という態度を貫き、自分たちの正当性を宣言するかのように、李唯建との廃縁をの往復書簡を天津『益世報』 (1930年2月14日～4月8日) に発表した。さらに翌年それを李唯建との共著『雲鷹情書集』 (1931年2月神州国光社) として出版したのである。}

### 3.2 思想の転換

実は廃縁は郭夢良が亡くなってから李唯建と出会うまでの間に、ある男性から求愛されていて、その愛を拒んでいる。その男性とは亡夫・郭夢良の友人の弟で、當時上海の法政大学の学生であった瞿冰森である。その経験は『帰雁』(『華嚴月報』1巻1期～8期、1929.1.20～7.20) に描かれており、次のような内容である。夫や母の死から立ち直らずにいる主人公の前に、力強く励ましてくれる青年が現れる。その熱烈な求愛に対して、「私」は自分が未婚であり、年上であること、そして世間の風潮を怖れて相手を受け入れることが出来ない。青年はその心を理解できず、ついには他の女性との結婚を選択してしまう。

この作品に対し、廃縁は『自伝』の中で次のように言う。

『帰雁』を作成したときは、私の思想が転換していた最中であった。……『帰雁』の中には私の熱烈な叫び、熱烈な追求がある。しかし私の頭の中には封建時代の余毒が残っており、礼教を打破するよう高らかに叫ぶことはできなかった（到了我作鴻雁的時候,我的思想已在轉變中, ……在歸雁中,我有着熱烈的呼喊,有着熱烈的追求,只可惜那時節,我腦子裏還有一些封建時代的餘毒,我不敢高叫打破禮教的藩籬）。

その後、廃縁は自身が再婚に踏み出すことで、自らに残る「封建時代の余毒」と訣別しようとしたのだろう。再婚後、廃縁は『女の心（女人的心）』(『時事新報』1933.2.14～5.5) を発表し、恋愛結婚をして娘を産んだ女性が、年下の男性との不倫の恋愛に踏み出す姿を描いている。

廃縁はこの時期を思想の転換を経て飛躍を遂げた「開拓期」と呼び、その代表作品として『女の心』を挙げている。

### 4.『女の心』——女性だけに求められる負担

『女の心』のあらすじは以下の通りである。ヒロインの秦璃は理想であった恋愛結婚をし、一女をもうけた。しかし夫・賀士は結婚後すぐに欧州に留学へ行ってしまう。既に三年も会っておらず、賀士からの愛を感じられない日々を送っていた。そんな時に友人・黎騊の結婚式で出会った学生・純土と往復するようになる。お互いに恋愛感情を持ちながらも、秦璃は自分が夫と娘があること、年上であることに躊躇し、それ以上の関係に進もう。
としない。ところが、ある日受け取り賀土からの手紙には、彼がベルリンでドイツ人女性と知り合い、親しく交際していることが書いてあった。

素樫はショックを受け、これをきっかけに純土との恋愛に踏み出す。二人の恋仲が世間の噂になると、二人は愛を貫くためアメリカ留学へ旅する。それから素樫は単身でアメリカからドイツに渡り、夫に会って離婚を申し出る。そして離婚が成立すると再度アメリカに戻って純土と結婚するのである。

この作品では、『帰雁』と異なりヒロインは新しい恋愛に踏みだし、それを成就させるために主体的な行動を見せる。廻懐はこの作品に対し、自ら次のように評している。

私が書いた『女の心』では、大胆に垣根を打ち破るスローガンを呼び、旧勢力に反対し、より大胆に女性だけに求められる貞操を否定したものだ。

痛い言い方をすると、これに改めて問題の真さないものだ。廻懐的性格は、次のように考えるのである。

賀土が最初に自分にすまらないことをしたのだ。純土に出会いはしたけれど、賀土のこの手紙の前にはずっと自分を抑えて、礼を超える行いをしようとはしなかった。今、賀土がミリアム姫を愛したなら、私に恋人がいても、皆は相殺してくれるだろう。

―素樫先輩、私たちは、まるで別世界のように遠く離れている。―

まず主人公・素樫は純土に魅かれたならも、夫の不貞を発見するまでは恋愛に踏み出すようなことはない。夫からの手紙に女性の影を見た素樫は、次のように考えるのである。

賀土が最初に自分にすまないことをしたのだ。純土に出会いはしたけれど、賀土のこの手紙の前にはずっと自分を抑えて、礼を超える行いをしようとはしなかった。今、賀土がミリアム姫を愛したなら、私に恋人がいても、皆は相殺してくれるだろう。

―素樫先輩、私たちは、まるで別世界のように遠く離れている。―

まず主人公・素樫は純土に魅かれたならも、夫の不貞を発見するまでは恋愛に踏み出すようなことはない。夫からの手紙に女性の影を見た素樫は、次のように考えるのである。

賀土が最初に自分にすまないことをしたのだ。純土に出会いはしたけれど、賀土のこの手紙の前にはずっと自分を抑えて、礼を超える行いをしようとはしなかった。今、賀土がミリアム姫を愛したなら、私に恋人がいても、皆は相殺してくれるだろう。

―素樫先輩、私たちは、まるで別世界のように遠く離れている。―

各種の手紙を読むと、賀土はや焼けた日本に恋してしまい、はなれ、是巡り続ける。純土と共にアメリカに渡って新生活を始めようとする時ですら、晴れやかな表情の純土とは対照的に、素樫は次のように言う。

「純土、あなたは身体の自由だけでなく、魂の自由は考えていないのね。「不自由なのかい？」純土は不思議そうに言った。「ええ、賀土や娘、そして母の前では、私は裁きを持つ囚人がの」「純土! それが身体の自由、それほど顧慮するべき自由! 「不自由で？」純土詰問。の「你的靈魂有甚麼不自由?」「當然、在賀土的面前,在我女兒的面前,甚至在我母親的面前,我都不免是個待罪的囚犯呢!」（c）

こうした女の心を、男性の純土は理解することができない。二人が結婚して帰国した後、
素璞は世間や家族の目を憚って別居を提案する。素璞の心を測りかねた純土は、弟の明士夫婦に次のように相談するのである。

「素璞は新文化の洗礼を受けており、礼教を破壊するなら、徹底的にするべきなのに、どうして二歩進んでは一歩退くのだろう？」「これこそ女の心のよし」明士の妻は言った。「歴史を見てみなさい。古くから今まで、社会の糾弾を恐れなかった女が何人いるか？女を責めることはできないわ。この社会は女にとって厳しく責任を追及するもので、素璞ねえさんの今の心はとても苦しいはずよ。彼女はこの社会で女の先駆けになろうとしているのだから……」「素璞は受過新文化的洗礼的、她既想打破禮教的藩篱，就應當作個徹底，為甚麼走兩步又退一步呢？」明士的妻説：「你們翻開歷史看，從古到今，有幾個女人不懼社會的糾弾呢？本來難怪女人，這社會對於女人是特別的責備得嚴，我想素璞或現在的心也夠苦了，她要做這個社會裡的女人先鋒……」

こうした素璞の苦しさは、李唯建との恋愛における廬隱自らのものであったろう。平等な男女関係をもたらすはずの恋愛においても、女性はより多くの束縛——貞操や「母」であることに——に縛られている。廬隱はこの作品において周囲の社会の批判と戦いながらも、自らに残る「封建時代の余毒」のために一進一退して苦しむ「女の心」を掘り下げたのである。そして彼女は最後に素璞が純土とともに生きていく覚悟をする結末を採ることにより、この「女の先駆け」が東轍を克服し、明るい未来を目指していく姿を示している。

おわりにかえて——廬隱のノラ

廬隱は二回の結婚を経て、近代家庭に身寄る女性の問題を深く掘り下げて思考するようになった。そしてそれをテーマにした創作や女性解放論を執筆したのである。それらの作品はみな近代家庭に身寄る男女の問題をテーマにしており、五四期の作品にはなかった鋭い女性意識に満ちている。

例えば「花瓶時代」（『時事新報』副刊『靑光』1933.8.11）では次のように言っている。

天が慈悲を発して、この世の尊大な男たちを動かし、彼らの高貴な手によって、女性たちを奴隷階級から解放したことに感謝せねばならない。現代の女性は得意になって花瓶時代の幸運を享受している、…しかし花瓶たちはいつの日か、楽しみに過ごすのをやめ、男たちに見かけ倒したいと懇願され、他者に割られてしまうかもしれないのだ！…だからこれから花瓶たちの運命は悲惨なもので、女性は自らを救うことを考えねばならず、このような花瓶の時代を打破しようと覚悟し……決して男道に恩恵を求めるものではなくならないのだ。」（一不能感謝上甚，它既大發慈悲，感動了這個世界上傲岸自尊的男人，高抬手指，把婦女解放了，從奴隷階級中解放出來，現代的婦女，大可揚眉吐氣的走著她们花瓶時代的紅運……但是花瓶們，……說不定有一天，要被這些欣賞而鼓舞着你們的男人們，嫌你們中看不中吃，碎的一声把你們榨的粉碎呢！……所以這個花瓶的命運，固然太悲慘；你們要想自救，只有自己决心把這花瓶的時代推翻，……不能再妄想從男人們那裡求乞恩恵。）

このように廬隱は、五四期にエリート男性知識人達が主張した「ノラ言説」で切り捨てられた問題——ジェンダー非対称に気づいた。そして旧家を出ただけで満足し、近代家庭のなかで安逸する「中国のノラ」に警鐘を鳴らしたのである。

——45——
论“中国的娜拉”庐隐的反叛

羽田 朝子

在中国五四新文化运动中，青年知识分子受到了西方思想的影响，他们主张打破封建社会和封建家庭的观念，并强烈反对父母为主的包办婚姻，追求自己为主的自由恋爱、自由婚姻。他们热烈地赞扬易卜生《玩偶之家》笔下的女主角娜拉，因为他们眼中，娜拉就是反抗封建家庭，为了追求自由恋爱而逃出家门的女英雄。

当时的女性作家庐隐（1899～1934）也受到了五四思潮的熏陶，自己扮演“中国的娜拉”的角色，实行了家庭革命。她经历两次结婚生活，进一步深入思考现代家庭隐而不见的妇女问题。她发现了五四知识分子的言论所忽视的问题乃在于男女不平等。本论针对于庐隐在30年代所发表的女性解放言论，及对近代家庭的批判等方面做深入探讨。